

「探究学習・調べる学習ひろば」参加者のコメントから_7

8月9日(土)20:30~22:00に実施された「探究学習・調べる学習ひろば」の第7回は、47名がライブ配信に参加、事後アンケートに10名が回答して下さりました。以下、抜粋引用(青文字)するとともに、簡単な回答・コメントを記します(※…片岡 / ★…山崎)。

資料置き場 @GoogleDrive

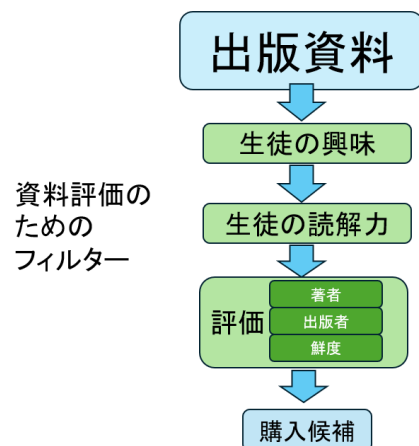
- ・配信の音声アーカイブ & 配布資料はこちら→([アーカイブ配信/資料置き場](#))
- ・清教学園の卒論テキスト、生徒作品サンプルはこちら→([探究大全基本資料](#))

「探究学習で使える資料」評価のポイント

本日、やっとリアルタイム参加できました。「使える資料」や「使えない資料」など、資料の評価は、どこでジャッジされているのか、とても気になります。「誰が書いている」は基準になりやすいと思いますが、それ以外にどのような評価基準はありますか?(44さん@中学校図書館学校司書)

※「使える資料」や「使えない資料」は生徒が最後に判断しますが、その前になにを学校図書館の蔵書とするのか、フィルターをかけます。そのフィルターとは、第一に「生徒の興味」(学習指導要領ではない)。第二に経験的な「生徒の読解力」のレンジ(範囲としては小学校高学年から一般書)。第三に資料の「質・評価」です。ご質問は第三の質ですね。この中身は①「著者」…ノンフィクションなので肩書きが頼りです。②「出版社」…うちの図書館の出版社ランキングを作ったらどうなるでしょうか。やはり大手が多いですが、それはそれ侮れない出版社も(個人的には、八坂書房・農文協・原書房・DK社<翻訳本>…)多いです。③「鮮度」…TOOLi-Sを件名で検索すると年代順で表示されるので上から買います。5年以内が多いかな。…という話を書きながらつい図にしまったのが↑図。厳密にこうしたフィルターを通していかるといってもなくて、あくまで自分の中のふだんからぼんやり持っている評価基準です。

それはそうと学校図書館全体の鮮度を問題にした「蔵書新鮮度」という指標を作ったことがあります。それはどこかで機会があれば。



★図書館の受け入れ業務としての「使える資料」は片岡先生が詳しく書いて下さってるので譲ります。一方、目の前の個々の生徒にとって「使える資料」かどうか、判断のしどころがあるのかなど。レファレンスを受けた時には、生徒に「なんでこの分野を研究したいの?」「個人的な動機は?」などインタビューします。「どんな情報がほしい?」というよりも「なんでその研究したいの?」なんですね。動機への言及から、生徒のテーマの方向性が見えてくることが多いので、生徒と書架に立ちながら関連の本を十数冊選びます。目次を見て生徒の方向性と対応している、入門書・学術書まで甘い辛いを入れるなどがポイントです。その後、できればためし読みの時間を設けて、「この中から読めそうな本、読みたい本選んでみよか〜」と声をかけます。5、6冊生徒が借りれば大成功、ダメならまた一緒に探す、という繰り返しです。①研究の動機に注目しながら一緒に書架で十数冊探す ②読みたい本・読めそうな本を生徒に選ばせる、この2点が、レファレンス時の「使える資料」のポイントですかね。

「SDGs」テーマに取り組んだ生徒

ありがとうございます。やらない方がいいテーマが面白かったです。確かにそうだなあということばかりでした。本校はSDGsが総合探究のテーマになっています。もしSDGsでやったことがありましたら何をやったのか教えてくださいとありがたいです。(いなほさん@高校司書)

※「SDGsでやったこと」というのは、「SDGsで『やらない方がいいテーマ』として生徒がやったこと」でしょうか。それは…「やらない方がいいテーマ」の筆頭は「興味のないテーマ(題材)」なので、かなりの割合の生徒が「やらなきゃいいのに」という題材に取り組んでいたようでもあります。でも、授業展開によっては改善も見られるようなので、そのあたりの分析は山崎さんの報告(リンク)に譲ります。

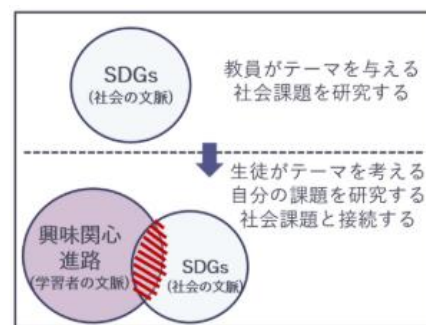
★んー、片岡先生が上記のように仰るとは言え、山崎が過去に清教学園高校で任されたSDGsの授業展開でも、「興味ないのならやらなきゃいいのに」という生徒に関する改善は見られませんでした。いちおう資料貼ります(→[リンク](#))。とはいえやってみた方法は、①まず自分の興味あることをふつうにやる(中3の卒論のように) ②あとからSDGsの17目標にくっつけて理論武装する というやり方です。

例えば「初音ミクについて研究したい」→「初音ミクが日本だけでなく国際的にファンを得ている」→「二次創作アリの同人文化として広まり、日本だけでなく各国の多様な文化と初音ミクが結びついて創作活動が行われムーブメントが起こっている」→

「二次創作文化が各国文化を繋ぎ、相互理解を促し、『人や国の不平等(SDGs10)』撤廃に繋がる」という感じです。詭弁ですが、生徒の興味で分野は選べたかなと思っています。にもかかわらず、SDGsと言われれば興味が無いのにそれを選ぶ生徒は絶えませ

んでした。で、なぜこうした回りくどいやり方をとったかというと、高校の授業は山崎の一存のみで

「SDGs」テーマの枠を取り払えなかったからです。授業者の誰もが、自分の思う一番いい形で授業設計できるわけでもないんですね。色んな力学が働きます。それでも自分が授業を担当する生徒が「やる



学習者の文脈からテーマを考える授業設計(図7)

気も興味もなく、やれと言われたから SDGs 分野をやる」ことに僕は耐えられなかったので、上記のような策をとりました。

話は変わり、僕や片岡先生、南先生が担当する中3の「自由テーマの探究学習」でも、生徒自身が自分の興味から SDGs 分野を選び、立派にやり遂げる生徒はたくさんいます。当たり前ですが、「SDGs に興味を持って」「興味なくてもやれと言われたらやれ」ではなく、その生徒自身にとって大事なテーマがたまたま SDGs 分野に該当していたのだから、いい研究になります。昨年の中3を例に出します。

- ・結婚への意識はどのように変化したか：現代社会が生み出した多様な幸せのカタチ
- ・2010年代の映画においてLGBTはどう描かれてきたのか：差別を舞台としたプロット展開
- ・なぜ点字ブロックにはガイドラインと実際の敷設状況に差が生じるのか：設置の現状と人々の意識
- ・水産・レジャー産業において外来魚はどう扱われるべきか：地域の価値判断を尊重し未来を切り開く
- ・人間を癒すことを目的とした功利的な動物利用は許容されるのか：イルカのアニマルセラピーを例に
- ・地球環境問題に対してどう向き合うべきか：テクノロジーに頼る生活からの脱却
- ・排ガス規制時代の自動車エンジンに何が求められるか：内燃機関のよさを維持する水素燃料の普及
- ・無印良品は大量消費社会へのアンチテーゼとしてどんな商品を目指してきたか：質とデザインに拘る普遍的プロダクト
- ・パレスチナ問題深刻化の分岐点はどこか：ガザ内政不安定化とイスラエルの支配・差別の恒常化

ジェンダー、消費社会、ハンディキャップ、動物倫理、紛争、エネルギーと多様です。いずれも全て生徒の動機があったからこそその研究です。そして、こうした直接的な SDGs に該当する研究でなくても、先に挙げた初音ミクの例のように、興味関心からスタートした論文はほとんどの場合何らかの形で社会課題と繋がってきます。昨年、中3が取り組んだ研究一覧を GoogleDrive に入れてあるのでご覧ください(→[リンク](#))。大事なポイントは、「SDGs 分野やれ」でも「SDGs 分野やるな」でもなく「興味があることやれ」なんですね。

アリバイ・コスパ重視 / 「やめときってテーマつったって、じゃあどうすればいいんですか！」

本日もありがとうございます！夏休みに入ってこれまでの回を聞き直しています。改めてアーカイブ配信・資料配信、ありがとうございます。聞き返したり、これまでのコメント返しを見返してみると、新たに気になることや発見があるので面白いです。数回前からの新規コンテンツ「清教学園の本棚」も毎回楽しみにしています。いつか清教学園を見学してみたいですし、生徒として通ってみたいですし、勤務してみたいなあとと思いながら棚の写真を眺めています。これからも楽しみにしています。いつの間にか感想フォームにハンドルネームが実装されているのに気付きました。ラジオっぽくて面白いなと思いつつ、ネーミングセンスが問われているな…と少し緊張しました。

(動植物テーマについて)

本校では動植物をテーマにする子はあまり見ないのですが、「犬は人間の言葉を話すことができるのか」や「うさぎはなぜ鳴かないのか」といった動物の体の仕組みをテーマにする子が稀にいます。また、なぜか興味へのこだわりはそこまでなく、アリバイコスパ重視であることが多く、ある程度取り組んだら「終わりました」と言って終わりにしてしまうため。ちょっと残念だなあとと思うことが多いです。動植物テーマに限った話ではないのですが、生徒によって進捗度合いが違うため、一斉にゴールと

いうことはないと思うのですが、アライバイ・コスパ重視で「え、そこで終わらせるの？」といった生徒はいますか？その場合、何か声かけか対応はしますか？

(やめときテーマについて)

「やめときテーマ」が多い勤務校なので、今回のテーマはとても楽しみにしていました。やめたほうがいいよ、という「じゃあどうすればいいんですか！」と拗ねてしまうので(笑)、なかなか「知らんけど」と言い切れないのが毎回悩ましいです。とりあえず「やってみれば？」と言ってそのままやらせることが多いのですが、やはり意外と面白いものになるか、形らしきものにはなる生徒の2パターンだなと思います。

ちなみに、「やめとき」といわれた生徒の中に、「じゃあどうすればいいんですか！」と言い出す生徒はいますか？「知らんけど」のあとに①テーマを変える子②テーマを継続する子の2パターンだという話だったかと思いますが、それなりに動機は強いけどやめとけと言われてやめようと思う、でもほかに気になることない、なかなかテーマが決まらない…の場合は②に移行するのでしょうか？(あざらしさん@中高一貫校司書/司書教諭/探究科教員)

※あざらしさん、聞き直していただけるなんて感激です。清教学園見学はいつでもどうぞ(と、勝手に言っておきます)。名前があるとコメント書きやすいですね。ハンドルネームはまあ符牒なのでそれとわかれば…。今調べたら“handle”は取っ手のほかに「取っかかり」の意味も有るんですね。

「アライバイ・コスパ重視で『え、そこで終わらせるの？』といった生徒はいますか？その場合、何か声かけか対応はしますか？」…いかにもいそうですね。「犬は人間の言葉を話すことができるのか」

「うさぎはなぜ鳴かないのか」という問いを設定した時点で「さっさと終わらせよう」という意図が透けているようでもありますね。清教学園の場合はまず動機(いずれ「おわりに」の項目になる部分)を吟味しますので、「なぜ犬が人の言葉を話すことに関心があるのか」「うさぎの発声になぜ興味があるのか」「これまでにどんな本を読んだのか」「それらがなぜあなた自身と社会にとって重要なのか」を書かせるのでしょうか。書けないならそれまでということで。さらに「自分でもすぐに終わりそうな、つまらないと思う題材なんてやめた方がいいよ～」と全体に向けてはいうかもしれませんね。

※「『じゃあどうすればいいんですか！』と言い出す生徒はいますか?」。そうした弱音を吐ける相手ではないと思われているので、私にはあまり言ってこないような…。そうした愚痴はカウンターでやさしい南先生や司書のみなさんに言っているような(言ってますよね?)。直接言われたなら「それを苦労して考えるのが探究学習なんだね」「どうしてもというなら止めはせんよ。まず関係する本読んで付箋紙つけてきて」とかいうかな。

「それなりに動機は強いけどやめとけと言われてやめようと思う、でもほかに気になることない、なかなかテーマが決まらない…の場合は②(テーマを継続する)に移行するのでしょうか?」たぶんそうでしょうね。その先自分で判断するしかないのだから継続するなら継続してもらうしかないですね。アドバイスはしますが強制はしません。でも、「この山道いくとキツイ滝や岩場が待ってるよ。ビギナー向けルートではありません。装備(やる気)・体力は大丈夫?」と声を変えるのは登山の先達としては当然かと。

★聞き直しありがとうございます。アーカイブも本棚も、どれだけの人が見てる・聞いているかわからないまま出してるので、反応頂けるのがとても嬉しいです。ハンドルネームはためしにやってみましたが(ハンドルネームでエッセイを書く・相互評価する授業があって、そこからの思い付きです)、リスナーどうしの間でもお互いの個別認識ややりとりが生まれると楽しいかなと思って。別に固定ハンドルでなくても構わないので、気楽に変えてもらっても。

>アライバイコスパ重視の生徒

これ、なんでか近年は見ないんですね。11月に論文提出なのですが、翌年3月までブラッシュアップしてる生徒がほとんどの印象です。動植物テーマも。やっぱり1年間の研究を通じて、「これは私にとって大事な研究だから」みたいな自信や自負が、それなりに醸成されてるのかなと思っています。論文が製本されて蔵書になるとか、合格した後もS/A/B/C/D評価があり目標は高いとか、なんか色々仕掛けが上手く行ってる印象です。片岡先生も書いてますが、アライバイ・コスパ生徒は分野を問わず「そもそも興味ないテーマ選んでる」ことばかりですね。

>「じゃあどうすればいいんですか！」

想像して笑いました 笑 山崎にその調子で逆ギレする生徒はあまりいませんが、「どうしたらいいでしょうか…」と悩みを吐露する生徒は多いです。こちらが授業で言った「やめた方がいいよ」を素直に受け取って、でも直後に付け加える「悩んでたら相談してね」もちゃんと聞いている。その上で、どうしよう、このまま続けるべきか、他の分野を模索するか、ちょっと相談させてください、との声は、中3の5月～7月にかけて大変多いです。そういう生徒相手には「知らんけど」はスタンスとして維持しますが、口には出さないですねー。いつも思いますが、ほぼカウンセリングに近いです。

パターンのには仰る通りの2つ。どちらが多いかはわからない。その場で決まるとも限らない。上記のようなカウンセリング的な研究相談に加え、一緒に書架に立ち参考文献になりそうな本を手渡すレファレンスも並行します。読んでみて、挫折して、また新しい本を手に入れて…といった、連続する過程の中で、どちらに転ぶかを生徒自身が決め手いくように見えます。

電子図書館・データベースの活用

はじめて参加させていただきました。貴重なお話をありがとうございました。今年度より着任した学校で、はじめて探究を管轄するグループに所属することになり、ただ、学校図書館が探究で有効活用されているという状況ではなく、なんとかしたいな、勉強もしたいなと思っていたところ、良い機会に巡り合えてうれしいです。

動植物のレファレンスには困らないよねというところで、共有していただいた蔵書の写真も拝見しながらお話を聞いておりましたが、まずは蔵書構築だなぁ、蔵書把握と選書だよなぁと途方もない気持ちになりつつも、気合が入りました。

正直に申し上げて、本校の一部の学年では、探究アドバイザーとしてChatGPT(教員がアレンジして、インターネット上の情報源を出させる仕様にはなっていないようですが)に問いづくりやまとめのサポートをさせており、成果物も、出典なしのスライド発表のみという状況でして、なかなか前途多難ではあります。40人×10クラス×3学年規模、かつ進路多様校というなかで、なんとか”探究”をしようと工夫をしているところなのだと思いますが、それであれば、せめて出典を書かせた”調べる学習”のほう

が良いのでは…いや、それも難しいのか…とってしまうような、厳しい状況です。こちらの「ひろば」での機会を、今、自分の場所でできることを頑張るための活力にしたいと思います。

さて、今回の話とは全くそれた質問で恐縮ですが、清教学園さんでは、電子図書館やデータベース等の活用はされていらっしゃるでしょうか？既出でしたら申し訳ありません。付箋を貼るお話がよく出てきましたので、どうしていらっしゃるのかなあと思いました。（MMさん@県立高校図書館学校司書）

※MMさんコメント有難うございます。「電子図書館やデータベース等の活用はされていらっしゃるでしょうか？」とのことですが、私のいた4月まではジャパンナレッジもそれほど実装・活用されていませんでした。以前テストケースで使ったときは生徒が訳も分からず引用していたのが印象的でした。引用文の漢字が読めず理解もしていないんですね（‘◇’）。また、生徒作品をデジタル化して電子図書館構想にお金をかけたこともありましたが、生徒は実物を手に取りたがるようでお蔵入りになってます。これからはまた新しい活用がはじまるのかもしれませんが、現状こんな感じです。

※「探究アドバイザーとして ChatGPT（教員がアレンジして、インターネット上の情報源を出させる仕様にはなっていないようですが）に問いづくりやまとめのサポートをさせており…」。おお、新しい展開が。「出典なしのスライド発表」なんですね。ふりかえって、清教学園で論文化してから題材に変化が見られたように、生徒は先生の要求に応じてアウトプットを調整してくるものです。つまり「出典なしのスライド発表」に生徒も合わせてきてしまうのです。「蟹は甲羅に似せて穴を掘る」ではありませんが、求めに応じて出力をしてくるものです。小学生でも高学年なら出典を書いて画用紙のレポートを作れるので求め方（先生の労力のかけ方）次第かな…と。多忙な先生が ChatGPT 利用で授業効率のコスパを求めるといわけですね…。

とまれ、ChatGPT で情報源を出させるなら出典まではもう一息では？（ネットの扱いはすでに述べたように面倒ですが）。

★初参加ありがとうございます。勤務校の様子もお伝え下さりありがとうございます。僕らとしては図書館使って、個々の生徒が興味を学べば、探究学習はむしろ楽になるよ、と思っているのですが、なかなかそうした体制をとられる学校は少ないですよ。興味を学ぼう、学校図書館を使おうという授業を体験したことが先生方にもなく、そうした機運がそもそも高まらないので、仕方ないことだと思っています。この「ひろば」もそうした状況に何かしらいい流れを作れたらと思っています。良ければ他の先生方にもご紹介下さい。ChatGPT 使うより、図書館に予算かけた方がコスパいいですよ。

>電子図書館やデータベース等の活用はされていらっしゃるでしょうか？

「朝日けんさくくん(新聞DB)」「河内長野市電子図書館」「ミナラボ(地図商圈DB)」の3点を契約していますが、活用は個々の生徒の研究シーンで必要になった時のみ、という状態です。授業として活用を促す、全員が使うということは一切なく、基本的には図書館の蔵書で探究学習を進めています。例えば新聞記事で事例を集める、大阪市内のラーメン店について商圈分析(そのエリアでどれくらい消費者がお金を落とすか等)するなどです。いずれにしても、研究がある程度進んで、自分にとって必要な情報が出てきたら使う、というやり方ですね。

図書館や図書は、生徒の学習初期から最後までずっと使えます。それぞれの分野に様々なテーマの本があり、書架をブラウジングし、付箋を貼りながら読んでいくというやり方は、自分がこの先その分野

で、どんなテーマの方向性にしていくか、という学習過程にコミットできるからです。一方で Web や DB は、検索結果が検索キーワードに依拠するので、利用者(生徒)自身に「いま、この情報が、このために必要だ、それを探するための専門用語(キーワード)は『〇〇』だ」という理解が無ければ使いこなせません。学習初期段階、その分野についてまだ素人であるとか、専門用語を自分自身が把握していないとか、テーマがどうなるかわからないという状態では使いこなせないんですね。このため、本校の DB 利用は消極的になっています。でも、ある程度研究が進むと強力なツールになります。

生徒の探究テーマ×将来の職業×親の圧 / 授業支援の場で司書は「探究学習の専門家」

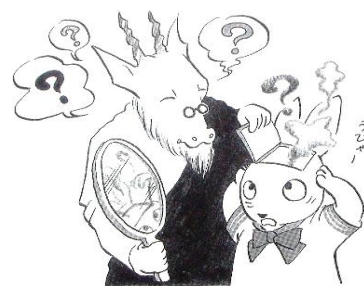
小学生が調べるテーマランキングのお話が、自校の本を選ぶ参考になりました。(この夏整備で数百万円選書したのですが、先日片岡先生から「カブトムシは泣くほどあってもいい」と言ってもらってかなり増やしました。次は犬も増やしたいと思います。) 今後も、小学生のお話も入れてもらえるとありがたいです。小学生がこんなに4類好きなのに、なぜ理科嫌いが増えるのか、という話題も興味深かったです。

「やめた方がいいよ～」というお話は、改めてテーマ選びの難しさを感じました。薬剤師と言われるとイラっと・・・という言葉は、分かるけれど手厳しいですね。(自分の若い頃を思い出して耳が痛かったです(苦笑)。自分が就活で苦労したのがまさにそこだと、歳を取ってから理解したので。) テーマ選びは自分探しなんだなあと思いました。探究学習を通じて、自分を知って深めていくきっかけにもなり得るんだなと。そういう機会に出来たら本当に素敵ですね。

あと、サラッとおっしゃっていただけると、それを裏から支える先生方の本の知識が膨大で圧倒されました。1人で選書して学校図書館の蔵書を構成している司書は、まず本を知っていなきゃ、とは分かっていますが次元が違う・・・ちびちびとでも研鑽積んで近づくのを目指します。キリがない作業だけれど「頑張ればこんな風になれる」という姿を見せてもらうことは刺激になります。今回もたくさん勉強になるお話をありがとうございました。

前回のアンケート「司書に対しどのようなサポート・スタンスを求めるか」という項目が、参考になると同時に自分がやっている事(先生用の図書館だよりを1~2ヶ月に1回発行)を後押ししてくれたようで「今後も続けよう」と励みになりました。最後に書かれていた「授業支援でのテクニカルな要望もある」というお話を、ぜひ詳しく教えてもらいたいです。(自分に対応可能なレベルの事なのはさっておき、目指したいと思います。)(なおさん@小学校学校司書)

※「イラっと・・・という言葉は、分かるけれど手厳しいですね」。…なんていうのか、自分の中で小さなアラートが発動するんですね。「そっちじゃないよー!」という。「薬剤師ってホントですか? どうして? なぜ?」という吟味が続けば続くんですけど、言えば言ったで、まあ、たぶん生徒なりに安定していた価値観が揺さぶられるのでそれは嫌われますよね。なんかソクラテスみたいですねえ。そういえばソクラテスも最後は「知らんけど」ですねえ…。



昔作った『クックとタマ次郎の情報大航海術』という本に登場したソクラテス。ドラゴンのつもりで描いたら「山羊」と言われた。

「膨大な知識」と言えるようなものではありませんし、研鑽というほど緊張していませんが、生徒の題材に引きずられて経験値は上がっていくのだと思います。なにしろほとんど興味のない（行ったこともない）ディズニーランドやUSJについて、図らずも詳しくなってしまうのですから。テーマパークに興味はなくとも「生徒の興味」には興味があるんだと思います。

★途中で話題になった「薬剤師(ほか士業/歯科医/金融/etc.)」は、生徒の探究テーマ×将来の職業×親の圧 という結びつきで、ひとつテーマ設定できそうです。経験上、その手のテーマを挙げてきた生徒はだいたい興味がなく、動機がなく、論文が上手いいかないことが多いです。でも、能力が高かったりするので、論文を完成させることはできる。仰る通りテーマ探しは新たな自分との発見ですし、そこに他者による強制や圧力があると、なんか歪んでいくんですよねえ。教育を語るうえでけっこう大事な話のような気がしています。

>先生方の本の知識が膨大で

別の館種で働いていたからこそ比べられることですが、清教学園で働く中での「オン・ザ・ジョブ・トレーニング」はすさまじいものがあると思います。カウントする余裕はないですが、レファレンスの件数とテーマの多様性が圧倒的に違う。自分はいいかげんな人間なので、なおさんのような自己研鑽意欲も全くないのですが、ひとたび働き始めると待ったなしで、毎年150名の生徒が好き勝手に研究テーマを決め、悩み、支援を求めて来る10年間でした。ディズニーランドにも、初音ミクにも、K-POPにも興味はないですが、彼らの求めに応じて資料探索の知識や勘は鍛えられざるを得ませんでした。そういう授業設計になっているからこそその現場だと思います。授業設計と図書館での立ち回りは両輪なんだと思います。

>「授業支援でのテクニカルな要望もある」というお話

先生用図書館だよりすばらしいですね。こちらはそうした営業活動をもう何年もサボっていて…。大変なお仕事だと思いますが、ぜひ頑張ってください。

授業設計、とりわけ探究学習のそれは、先生方も手探りなんです。どういうシーンで、何を目的に、どういった資料を使うか、といった手順がとても重要になりますが、「情報集めに1時間本探しします。ネットより本の方がちゃんとした情報なので、本を使います」みたいなアバウトな目的や指示、支援では、だいたいネット利用に負けますよね。

僕が他の先生の授業支援に関わるときに気を付けていたのは、やはり「そのやり方はこういうリスクがありますよ」「それじゃ図書館の資料を集めてもあまり活かせませんね」「こういう課題にした方が生徒のテーマもいいものになるし、図書館活用の意味もありますね」みたいな形で、図書館の強みや資料活用の合う・合わないを伝えながら、授業設計を一緒に考えていくやり方です。どうしても司書の立場だと「先生がこういう授業をやりたがってるから」と受け身になり、言われた支援を準備しがちなのですが、探究学習に関しては先生自身もほとんど素人なんです。むしろ情報リテラシーや、資料活用や、アウトプットに関しては司書の方が専門性ある(はず)です。ではどういった細かなアドバイスをしていくか、こちらの知見を踏まえて授業設計を提案していくかは、これまでこの「参加者のコメント」に返してきたような内容です。様々あります。WebやDBを使うべきシーン、図書館の書架とテーマ設定の関連、動機がないと探究はうまくいかない、レファレンス、協働学習の難しさ etc. 探究学習をめぐる悩みやテクニックは色々あるので、そうした知見を踏まえて先生をサポートできればいいですね。

最近では分掌や教科としての「探究科(部)」に学校司書が名を連ね、授業だけでなくカリキュラムマネジメントに司書が関わる学校も増えています。探究学習の、資料活用の専門家として、先生方と一緒に、授業や体制を作っていく役割と専門性があるはずなんです、この立場は。

「興味がある」状態も実は色々 / いずれリスナーの皆さまに喋ってもらおう企画も検討中

小学生にとって、生きもの（動植物）は永遠のテーマなんだと改めて感じました。確かに、自分も小学生の頃は生きもの（昆虫）にハマっていた記憶がよみがえってきました。後半のやめておけばいいのに～テーマはどれも確かに！と感じるものが多かったです。趣味をそのままテーマにすると、調べる目的が不明慮になっていき、うまくいかないという理由がよくわかる気がしました。調べるテーマは、最低限興味があるものでも、研究する、調べる、ができるテーマにしないと、時間だけが過ぎてしまい、結局うまくいかないということがわかりました。学校現場を知らない自分としては、毎回面白エピソードが聞けるので、とても勉強になっております。図書館現場でも生かされるよう復習しておきたいと思います。（原さん@公共図書館館長 司書）

※「趣味をそのままテーマにする自分は一体何者？」という問いに間接的にさらされるのですね。仮に単に「暇つぶし消費」をしているだけならば、「無為に暇つぶしする自分」を発見するんですね。自分にも先生にも動機が説明できませんから、袋小路が見えています。「そこから早く出たおいでー、楽しい道は他にもあるよー」と呼び掛けてはいるんですが。

ときに、公共図書館は今頃夏休み後半、レファレンスに追われる日々かもしれませんね。その場の一瞬の勝負ですからレファレンスインタビュー大事ですよ。保護者主導で図書館に連れてこられる子どもさんの話をいろいろききました。本人に興味を尋ねるまえに保護者が立ちはだかるという…(‘◇’)。そんな話をそのうち公共図書館のみなさんにおしゃべりしてもらおうかな…？ 学校の先生はそうした状況がわからんのですよ。「夏休み後に語る、公共図書館レファレンスここが困った特集」とか、どうですか。

★興味があるものをテーマに選んでいるとはいえ、その興味がただ売られているものを惰性で消費しているだけだとか、盲目的に信奉しているとか、いろんなパターンがあるんですね。そこで探究学習をしてみて、ただの消費者から脱する生徒もいるし、自分は消費者のままつくられた一見幸せな世界に浸っていたいという生徒もいます。興味があっても探究学習がちゃんとできるかどうかは、その辺りが関わってきそうです。

「調べ学習」で終わってしまう / 文系探究の着地点

初めて参加させて頂きました。教員側の痒いところを搔いて頂き「そうだよな」と頷き同感しながら拝聴しておりました。このような「場」を提供して下さり、それが「関係」となって飛び立つような気もしました。悩んでいることは、文系の探究がどうしても「調べ学習」で終わってしまうことです。文献も読みました、フィールドワークもしました、インタビューもしました、結論はこうです、で終わってしまうところです。高校生段階ならもっと先にいけそうですが、他校の様子はどのようなものなので

しょうか。「文系探究の着地点をどう考えればいいのか」が希望テーマです。よろしければご検討ください。(tuttieさん@高校学年主任、進路、教務、国語)

※「文系探究の着地点をどう考えればいいのか」。「文系(理系も)探究の着地点」はその子によるのかもしれませんが。山崎さんが仰るように「興味を持ったことを学習し深める」「自分の学びを元に問いを立ててみる」「その問いに文献調査によって応える」「自身によるフィールドワーク調査で応える」に加えると、場合によっては「興味を持って読める本と出会えた」、時には期間内に「興味のある題材を探して彷徨った」こと自体が、ある種の着地点になる場合もあるかもしれません。

では「どこでどれくらい着地したか」を判別するかというと、最後のふりかえりアンケートの言葉です。ここでは毎年150人が150通りの道のりをふりかえています。ここで「探究学習が自分の糧になりえたかどうか」が、ある程度そこから知りえます。つまり、探究学習の着地点(価値)を判断するのは生徒自身です。論文ができたとかどうかとか、身につけた能力とは別なモノサシがあっているかと。

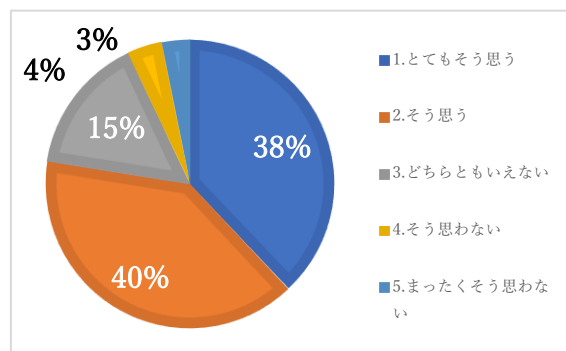
本当は丁寧に紹介したいところですが、数値として出せるのは「設問:後輩(自分の子ども)に卒業論文の授業を受けるように勧めたいと思いますか」です。ここで問うているのは、「自分の探究学習の道のりはさておき、一般的に(他者にとっても)こうした学習に意味が感じられるか」です。右図は2024年度130名のアンケート結果ですが生徒約8割が肯定的に答えており、15%の生徒が「どちらともいえない」、7%が否定的です。問題になるのは「どちらともいえない」と否定的回答の生徒です。

たとえば、「まったくそう思わない」と回答した具体的な文言を見ると次のように部分的に肯定している生徒も多く、愛憎半ばするといった感想も多いです。

シンプルに、やることが多く、不完全なものだと居残りもさせられるし、本を借りたらちゃんと返すといったことがめんどくさいので網(ママ)やりたくはないです。しかし、この授業でキーボードのタイピングになれることや自分の興味のあることについて調べることができるから少し楽しいことがある。最初は自分の調べたいことが決まらず、不安に感じることもあったが最終的には終わらせることができたから毎授業でやることをちゃんとすれば終わらせることができる。でももう一度はやりたくはないです。

さらに以下のように、探究学習をまったく受け入れられない生徒も10%弱現れます。

めんどくさすぎる授業。自分で調べるとかやりたくないし、取材とかもう論外。休みの日とか使って取材したい方に手紙を送って許可もらって計画立ててその場所に行って取材するとかもうめんどくさすぎてやる気失せる。まだ取材して終わりならいいけど、そのあと卒論に内容をまとめて書くとか苦行すぎる。



設問「後輩に卒業論文の授業を受けるように勧めたいと思いますか」への回答

改めて読んで、「ごめん負荷が大きすぎた」でも、「『めんどくさい』を乗り越えうるだけの、興味が持てる題材と彼はきっと出会えなかつただろうな」と思いました。実際彼は別の項目で「僕は自分が興味のあることについて卒論をしたわけじゃなくて、図書資料でこれだったら書きやすそうだなと思った本から卒論を書き始めたから」と正直に吐露しています。自分の興味と対峙するのが難しい、アリバイ作りに流れる生徒は毎年出現します。「本気になったらリスク高い」とでも考えているのでしょうか？… その結果としてアリバイに流れた生徒には、もれなく「苦行」が待っています（このあたりの生徒のコメント今の2年生に読ませてあげたい）。

「生徒がいかに関心の学習をどれくらい肯定的にとらえられたか」が着地点かもしれないところまで書いてきて感じましたが、ひっくり返して「興味のあることについて学ぶのは（本を読むのは）面白い」「興味を持てばパワーを出して学べる」と生徒が資質として身に付けてれば、それはそれで目指す着地点なのかもしれません。そこまで、学びへの信頼回復(?)ができればその後の人生、応用範囲はひろいのかなと（なんかまとまりませんね）。

ときに、私自身の授業の着地点として、中学生全員の論文完成は高望みだなあ、と思ってもいますが、やるとだいたいやれちゃうので、やめられないといえますか…。

★ご参加ありがとうございました。中々こうした内容を語り合える相手が周囲にいない方も多いので、ネットを通じてそんな場ができてると嬉しく思います。今後もよろしくお願いします。

前回の配信で「探究学習はどういうものか」「探究学習と調べ学習はどう違うのか」みたいな話を取り上げていますので、よかったらアーカイブをご確認ください。仰る「調べ学習」をどう定義されているのかを伺いたいところですが、我々のスタンスとしては「文献も読みました、フィールドワークもしました、インタビューもしました、結論はこうです」で、終わっていいと思っています。この辺り、学術現場の大学教員の意見も聞くのですが、専門家であるほどそれで充分と仰る方が多い印象です。なぜなら、学術研究も思ってる以上に「調べ学習」だからです。そうではない、と言われる、いわゆる「課題解決型」は、そうした社会課題があらかじめあるような分野やテーマ設定手法の一つであり、それ以外の研究は大学であっても「調べる学習」だからです。

恐らく高校段階での「もっと先」の例として、例えば社会課題系ならその解決策を考える、あるいは実際に何か企画に取り組むなどが「あるある」のやり方ですが、無理にそうしたアクションを取る必要はないと思っています。そうした課題形式を採用すればするほど、そのフレームをこなすこと自体が目的化していきます。テーマ設定や研究の内容が、生徒の興味関心といったものからズレていきます。ですので、「興味を持ったことを学習し深める」「自分の学びを元に問いを立ててみる」「その問いに文献調査によって応える」「自身によるフィールドワーク調査で応える」で十分なのかなと。

地域創生などの文科省推奨系のテーマ／学校図書館の授業外の取り組み

グーグルドライブからのアーカイブ配信にて、聴かせて頂いております。とっても勉強になりますし、何よりも「楽しい」です。私たち公立学校の司書にとっては、探究学習はとってもたいへんな課題です。資料数はたった1万2千冊ほどですし、デジタル新聞やジャパンナレッジもありません。総合的

な学習の時間も、地域創生などの文科省推奨系のテーマを、与えられたテーマとして、枠組み的に設定されてしまう状況です。当然図書館の授業利用は皆無のまま、すべての生徒がほぼ同じような研究発表に終始することになります。しかも客観的な根拠による仮説の論証構造を学ぶことのないまま終了となってしまうことは、とても残念です。それでも図書館独自にて、様々な工夫を粘り強く継続していこうと考えております。新書の各学年フロアへの短周期による展示や、百科事典のブラウジングなど、問題意識の種を子どもの内奥に生起させてあげるための方策は、公立中学校図書館でもなんとか可能のようです。特に、資料の少なさを補うゆえの、子ども一人ひとりとの対話は生命線だと切実に感じております。したがって、探究学習にはならない探究学習を、図書館の場でひっそりとはありますが、続けているところです。内から湧き出て来るわくわくするような好奇心を、子ども一人ひとりのスタンスに合わせて、引き出してあげたいと考えております。．．．．．。今後とも何卒宜しくお願い申し上げます。(埼玉の鉄おたさん@公立中学校学校司書)

※埼玉の鉄おたさん、楽しんでいただけるなんて、うれしい限りです。探究学習は支援する側も楽しいです。だから語って楽しいです。もちろん、生徒の選ぶ題材のデータが増え、学校図書館の蔵書が豊かになって付き合うのも楽しいです。また、生徒のいろいろ不可思議な行動がありますが、それがまた考える材料になりプリントになり楽しいです。

「地域創生などの文科省推奨系のテーマ」うーんあるあるですねえ。地域の資料なんてそうあるものではないですよ。で、「すべての生徒がほぼ同じような研究発表に終始」…きっと日本中の学校で見られる風景なのかもしれません。どこかで書いたかもしれませんが「地域にあるものはなんでも題材になる」という形で探究の内容が弾力的になると少しは題材に多様性がでてくるかもしれません。好きなことを調べて、その上で「地域における〇〇」ととってつければアリバイになるという…。自分がやったわけではないのですが、枠組みが動かないなら次善の策としてはどうかと。

「図書館独自にて、様々な工夫を粘り強く継続」是非頑張ってくださいたいと。今回のお便りに触発されて、清教学園での図書館独自の工夫を紹介できるかもしれません。乞うご期待。

★すごい、アーカイブを視聴して下さっている方がちゃんといるのですね…。どれくらいアーカイブが聞かれているかがわからないので、こうして「楽しい」と反応を下さるのがとても嬉しいです。

全国各地の学校図書館が活用芳しくないこと、予算的にも厳しいことは我々もよく知っていて、この「ひろば」もそんな状況に何かしら一石投じるきっかけになればなと思ってやっています。授業が動かなければ図書館も動かないのは当然の話なので。働いておられる現場でひろばを紹介できる先生がいらしたら、ぜひお伝え下さい。

コメント頂いたような地道というか、授業外での取り組みがいずれ何かに繋がることもあると思います。やっぱり読書してた生徒の方が探究の成果物もいいよね、展示を手にとったこときっかけに言い探究したよね、とか。そういった小さな事例の積み重ねや、或いは利用統計といったデータ分析が、授業者側に説得力をもって訴えられていけば、いい授業にも繋がり、図書館活用にもつながると思います。目に見えない図書館の効果や成果を、目に見える形でアピールできていたらいいですよ。